様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　４ 月　９ 日現在

機関番号：２８００１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１６９０９

研究課題名（和文）近世琉球の冠船と琉球王権に関する研究

研究課題名（英文）Study of Sakuho and Ryukyus kingship in early modern Ryukyus

研究代表者
麻生　伸一（ASO, Shinichi）

沖縄県立芸術大学・音楽学部・准教授

研究者番号：３０７１４７２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、琉球国王の王位継承儀礼の最終段階である「冠船」（冊封）の意義と役割を明らかにし、そこから琉球王権の実態を解明することを目的としておこなった。本研究では、冊封の事前準備と中国側との交渉、儀礼・宴会の運営、冊封をめぐる下級役人や職人の動向などの研究を実施した。
　本研究で得られた主な成果は、冊封の捉え方について示した点にある。すなわち、冊封時の諸儀礼分析などを通して、かならずしも清朝中国との関係だけで冊封は完結しておらず、薩摩藩との関係も含めて展開したのが琉球国王の冊封であったことを指摘した。琉球の冊封は、中国・日本との外交関係を前提としておこなわれた琉球国王の即位儀礼であったと言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の学術的意義は、冊封に関係する史料を調査し、その一部を紹介できたことにある。これまで閲覧・活用が制限、あるいは困難であった諸史料について、翻刻および現代語訳し、解説を付して刊行できたことは、今後の研究に資すものと考える。とくに現代語訳をおこなったのは、冊封について多くの人びとがアプローチできる下地を作ることができた。
　また、冊封儀礼が展開した首里城の機能・役割・活用方法を追究できた点は、これからの首里城研究のみならず、首里城再建にも役立つものと考える。

研究成果の概要（英文）：　The purpose of this study was to investigate significance of SAKUHO(冊封) in the early-modern ryukyus, and to elucidate the actual situation of the Ryukyus kingship. Specifically,preparation of SAKUHO,negotiations with China(Qing Dynasty),The administration main constituent and administration method of courtesy and banquet,trend of low-class government official and the craftsman.
　冊封 was not necessarily concluded only with relations with Qing dynasty China and pointed out that it was 冊封 of the King Ryukyu that developed it including the relations with the Satsuma feudal clan.It may be said that 冊封 of Ryukyu was the enthronement courtesy of the King of Ryukyu performed assuming diplomatic relations with China, Japan.

研究分野：琉球史

キーワード：王権　冊封　冠船　首里城

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

冠船とは、琉球国王を叙任（冊封）するために明清朝から派遣された使節や船、あるいは明清朝による琉球国王への冊封自体を指す。近年では清朝による琉球国王への権威付けであると同時に、国王の政治的な「通過儀礼」であることが指摘され、その意義が見直されてきており、冠船に関する研究は着実に深められてきたと言える。しかし、冠船を通した琉球・清朝・薩摩三者の連関性を捉えきれていない。とくに、王国末期に多大な財制負担の大きい冠船に王府が固執せざるをえなかった理由については分析が少なく、冠船の歴史的意義についても、近世日本への牽制となるという理解のみでは説明できず、依然検討の余地を残していると考える。

２．研究の目的

本研究は、琉球国王の王位継承儀礼の最終段階である「冠船」について、その意義と役割を明らかにすることを通して、琉球王権の実態を解明することを目的とするものである。

これまで、琉球王権への中国皇帝権力の付与という明清中国との関係が強調されがちであった冠船を、近世日本（とくに薩摩藩）との関係を踏まえながら再検討する。これにより、琉球王権の対外的意義について考察することを目指した。

３．研究の方法

本研究では、史料の収集と、分析という作業で進められた。主に那覇市歴史博物館に所蔵される尚家文書および台湾大学図書館に所蔵されている琉球関係史料を翻刻・現代日本語訳して公表し、さらにそれらの史料をもとに冊封の諸相について検討した。

これらの史料は、これまでほとんど活用されてこられなかったものである。

４．研究成果

本研究で得られた成果は、主としてつぎの５点にまとめられる。

（１）冠船派遣までの経緯について

清朝皇帝によって冊封が許可されるまでの動向を分析した。最後の国王となった尚泰王の冊封に関しては、尚家文書などに関係史料がある。そのため、関連史料を検討し、冊封使派遣までの首里王府と清朝当局（福州・北京）との交渉過程を追った。先行研究で明らかにされてきた交渉過程をより詳細にしたほか、交渉のなかで仲介者である通訳（河口通事）などの役割を注目することができた。尚泰王の冊封には、清朝の内憂外患があり、日程決定までの交渉が難航したが、琉球側に知見を与えたり、交渉に便宜を与えたりしたのは、福建出身者や河口通事と個人的な人的関係を持つ清朝官人であった。交渉の具体的な様相が明らかになったと考える。

（２）冠船中の薩摩役人との関係について

冊封使との対面を避けるため、冠船中には那覇から近隣の地域（浦添間切）へ一時的に引っ越していた薩摩役人であったが、彼らも冊封に不可分の存在であったことを指摘した。まず、冊封使来琉中の首里城儀礼を取りあげた。首里城北殿は冊封使、南殿は薩摩役人に対する接遇施設という理解が一般的だが、儀礼や宴会によっては、冊封使の南殿への招待が想定されるなど、首里城は広く使われていた。また、各部屋・殿舎の活用方法を具体的に分析するために、飾り付け（床飾り、茶器配置など）について検討した。そのなかで、座敷飾りのなかで、掛け軸を比較したところ、日中それぞれの価値観に合わせた作品が飾り付けられていたことがわかった。また、いくつかの儀礼から、冊封とは、中国のみならず日本側も含めた儀礼構造を持っていたことを指摘した。

（３）冠船中の下級諸士・職人について

冠船に関わった人びとについて、これまであまり注目されてこなかった。下級の諸士や百姓身分を取りあげて分析した。下級の諸士や百姓層である技術職にとって冊封とは、臨時的に設定される王府の役職に就いて功績を積む機会となることがわかった。事例として火花職人や冠船ハーリーの関係者を検討した。検討を通して、王府による就任規定がある程度想定されるものの、職人の「弟子」やハーリー船の漕ぎ手などとして下級諸士や百姓が役に就いた。しかし、昇進や功績の蓄積に不利となる場合やおそらく現在の職より有利な職への就任が見込まれる場合、役職によっては職を辞すことも確認できた。これにより功績評価システムの一端が明らかになったと思われる。さらに、中途での辞退者が散見できるため、例えば冊封使に供する花火技術の場合、技術継承がスムーズにはいかなくなる事態も起こっていた。ここから、冊封を介した職人・役人の任用は、王府にとって課題となる状況も現出していたことがわかった。

（４）即位儀礼と冊封儀礼

冊封は中国皇帝による王位叙任であったが琉球国王は、冊封前に国内で、あるいは日本向けに

は、冊封以前に「即位」していた。そのため、冊封について、王位就任の意味を検討する必要があった。そのため即位儀礼と冊封儀礼を比較した。結論として、儀礼構造自体は、両者は共通しているが、場面や王位を象徴するモノ・行為によって、即位を王位継承とみなしたり、冊封を王位継承とみなしたりしていることがわかった。そのため、即位・冊封は、段階的かつ相互に王位継承を補完していったとみなすべきであると指摘した。

（５）冊封関係史料について

本研究では、いくつかの史料を翻刻して、現代語訳・語注・解説を付して公表した。これらは、今後の研究に資すものと考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 麻生伸一	４．巻 -
２．論文標題 琉球王府発給文書に使われた薄墨について	５．発行年 2017年
３．雑誌名 琉球王府発給文書の基礎的研究	６．最初と最後の頁 108-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 麻生伸一	４．巻 901
２．論文標題 近世日本の対外政策と琉球	５．発行年 2019年
３．雑誌名 歴史地理教育	６．最初と最後の頁 18-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 麻生伸一	４．巻 52
２．論文標題 先王祭祀と琉球王権：琉球王国末期の廟制から	５．発行年 2019年
３．雑誌名 沖縄文化	６．最初と最後の頁 21-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 麻生伸一	４．巻 1
２．論文標題 王兄尚濬の祀りかた―王国末期の王族祭祀と首里王府―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 琉球沖縄歴史	６．最初と最後の頁 33-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 麻生伸一	４．巻 32
２．論文標題 琉球における冠船ハーリーの諸相－1838年を中心に－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 沖縄芸術の科学	６．最初と最後の頁 51-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 麻生伸一
２．発表標題 王国末期の廟制について
３．学会等名 沖縄民俗学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 麻生伸一
２．発表標題 摂政・三司官起請文について
３．学会等名 琉球沖縄歴史学会12月例会
４．発表年 2018年

１．発表者名 麻生伸一
２．発表標題 琉球沖縄の文化と鎌倉芳太郎
３．学会等名 INTERNATIONAL SYMPOSIUM:Art of the Ryukyu Kingdom（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 麻生伸一
２．発表標題 近世琉球社会のモノづくり
３．学会等名 新・琉球漆芸研究会議
４．発表年 2019年

１．発表者名 麻生伸一
２．発表標題 近世末期の即位儀礼と冊封儀礼―尚育王と尚泰王を中心に―
３．学会等名 第16回中琉歴史関係国際学術会議（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 麻生伸一
２．発表標題 近世琉球における国王起請文の意義について
３．学会等名 沖縄・八重山文化研究会
４．発表年 2016年

１．発表者名 麻生伸一
２．発表標題 倭寇研究と琉球
３．学会等名 稲村賢敷生誕125周年記念海域アジアと倭寇について考えるシンポジウム
４．発表年 2019年

〔図書〕　計5件

1．著者名 西里喜行、豊見山和行、赤嶺守（主編）	4．発行年 2019年
2．出版社 国立台湾大学図書館	5．総ページ数 514
3．書名 国立台湾大学図書館典蔵琉球関係史料集成第五巻	

1．著者名 黒嶋敏、屋良健一郎、上里隆史、村井章介、山田浩世、麻生伸一、豊見山和行、畑山周平、須田牧子	4．発行年 2017年
2．出版社 勉誠出版	5．総ページ数 360
3．書名 琉球史料学の船出	

1．著者名 林泉忠、松島泰勝、山田浩世、麻生伸一、沈玉慧、山城智史、楊子震、任天豪、鄭海麟、張亜中	4．発行年 2017年
2．出版社 海峡学術出版社	5．総ページ数 291
3．書名 21世紀視野下的琉球研究	

1．著者名 麻生伸一・茂木仁史（共編）	4．発行年 2020年
2．出版社 榕樹書林	5．総ページ数 270
3．書名 琉球国王尚家文書「火花方日記」の研究	

１．著者名 麻生伸一・茂木仁史（共編）	４．発行年 2020年
２．出版社 雄山閣	５．総ページ数 編集中
３．書名 冊封琉球全図 ―一七一九年の御取り持ち ―	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考